



ぷらっとシネマ 内戦を「部族抗争」と見る視線『  
ルワンダの涙』（マイケル・ケイトン＝ジョーンズ  
監督）

|       |                                                                                                    |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-06-29<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 萩原, 弘子<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10466/15461">http://hdl.handle.net/10466/15461</a>                  |



## 内戦を「部族抗争」と見る視線—— 『ルワンダの涙』(マイケル・ケイトン＝ジョーンズ監督)

まだ内戦前のルワンダ、首都キガリにある学校に、ジョン・コナーはイギリスから英語教師として赴任した。政情不安を監視するために国連軍がすでに常駐しているが、人々の生活は穏やかに見える。校長のクリストファー神父と純朴な学生たちに迎えられたコナーは、希望に燃えて教壇に立つ。しかし、平和な日々は長くは続かない。1994年4月、フツ人大統領ハビヤリマナを乗せた飛行機墜落というニュースが報じられると、フツ人による襲撃が始まる。コナーの学校に、ツチ人が逃げこんでくる。小さな学校で数百人の人々が避難生活をおくる。国連軍は無責任にも、人々を置き去りにして早々に撤退してしまう。閉鎖された校門の外には、フツ人の武装民兵が虎視眈々と攻めこむ隙を狙っている。人々を守ろうと懸命に働く神父とコナーだが、彼らにも決断のときが迫る。

人口800万の国で100万人が亡くなった苛酷な内戦を描いた映画だ。公開が予定されているが、日本のアフリカ認識を思うと、私は憂鬱である。

私の憂鬱には2つの理由がある。1つは、この映画が拠って立つ視点そのものだ。この戦争を「ツチ族とフツ族の部族抗争」とする見方はいまも力をもつが、この映画にはそれに対する挑戦がない。原題「犬を撃つ (Shooting Dogs)」が言うように、登場するフツ「族」は野蛮で冷血、まるで犬を殺すようにツチ「族」を殺す。

そもそも、フツ人とツチ人が民族的分類かどうかは議論のあるところだ。どちらに分類される人も言語はルワンダ語である。この地域の歴史を勉強すると、2集団の別は民族というよりむしろ階級に近いとわかる。その二分は、植民地時代に宗主国ベルギーが支配強化のために導入した民族登録制によって固定化された。ルワンダ内戦を描いたもうひとつの映画『ホテル・ルワンダ』(2004年)では、かつて支配者がつくった民族二分制度への批判が描かれていたが、それはこの映画にはない。ここに登場するフツ人はひたすら悪魔的だ。観客は、おのずとツチ人の側に共感してしまう。一方的な描写のせいで、内戦は、「アフリカの野蛮」に由来する「部族抗争」と見える。内戦終結後、新生ルワンダは植民地支配の遺制である民族登録を廃止したが、そうした克服の努力を、この映画は掘り崩しかねない。

私が憂鬱に思うもう1つの理由は、日本語字幕だ。これは『ホテル・ルワンダ』でもそうだが、英語で the Tutsi、the Hutu と言っているのが、「ツチ族」「フツ族」と訳されている。一般に日本では、ヨーロッパの民族を「～族」とは呼ばない。たとえば、スペインの the Catalonians は「カタロニア人」(人口7百万)と訳される。ところが、ナイジェリアの the Yoruba は「ヨルバ族」(人口2千万)と訳されてしまう。「定冠詞+民族名」という同じかたちの語を、日本語で「～人」と「～族」に訳し分ける根拠は、文明か野蛮かという判断以外に何があるだろう。『ホテル・ルワンダ』のように、「部族」視への批判がある映画でも、字幕に「～族」とあれば、その批判は伝わらない。ましてや、そうした批判的視点がない映画の字幕に「～族」とあれば、アフリカ人を「部族」(＝野蛮)と見る視線は自信をもつばかりだ。

ルワンダ内戦の根は、さかのぼればドイツ、ベルギーによる植民地支配にあるが、直接には1988年に始まるIMF、世界銀行による構造調整計画(SAP)にある。コーヒー単品輸出に依存する国で、輸出促進のためにと通貨を50%切下げたのが90年。その後、国営エネルギー公社の民営化、公務員解雇など、SAP定番の施策を実行した結果、電力料金の暴騰、国内農業の破壊を招いて、貧富の差が拡大する。暮らしが立たなくなるなか、これは「やつら」の横領だ、陰謀だと、不信と憎悪が増していった。内戦の元凶であるそうした経済と政治の問題は、「部族抗争」観の陰に隠れてここでは見えない。

映画化のもとになったのは、BBC記者が遭遇した虐殺現場での体験である。白人記者が見たルワンダ内戦は、アフリカ人の「部族的野蛮」が招いた地獄でしかない。映画の最後で、若い現地スタッフが紹介されるが、彼らが94年にこの学校に避難し、家族を殺され、自身は生き残った当事者だと知れば、複雑な思いになる。白人記者の視点から表現される虐殺の記憶、その表現に周縁的に参加する当事者——その転倒した関係を、私たちが奇妙に思わないのはなぜか。そんな問いから始めて、私たちのアフリカ認識を問い直す機会になるなら、一見の価値があるだろう。

(2006年、イギリス・ドイツ映画、116分)